

舞踊劇『小刀会』における女性英雄像とナショナリズム——舒巧の「弓舞」を中心に

王 瑩（名古屋大学）

1959年に初演された民族舞劇『小刀会』は、上海実験歌劇院によって制作され、新中国成立10周年を記念する作品であり、中国で最初に革命歴史を題材とした大型舞劇として知られている。1961年には映画化され、その映像は広く普及した。本作は19世紀半ばの上海における小刀会武装蜂起を題材とし、劉麗川、潘啓祥、周秀英ら義軍の英雄を描いて、反帝・反封建の闘争精神を高らかに謳い上げる。全七場構成で、蜂起から決戦に至る過程が段階的に描かれる。振付は中国古典舞、民間舞踊、武術を融合させたものであり、舞劇の「民族化」を象徴する代表作とされる。この創作は当時の文芸政策に呼応し、国家主義と民族主義を体現する舞台芸術として評価され、毛沢東をはじめとする中央指導者からも高く称賛された。さらに、松山バレエ団との交流など国際的な友好外交として機能し、その政治的意義は大きかった。史実では周秀英は犠牲したが、舞劇では彼女だけが生き残り、「順天行道」の大旗を掲げて戦いを率いる結末が描かれる。この改変は、女性英雄像を中心に据え、「不屈の闘争精神」を表現させ、政治的意図を反映している。本発表では、こうした上演史の変化に注目し、とりわけ舒巧が主演と振付を担った「弓舞」に焦点をあて、国家主義的文化事業における女性英雄像の表象と政治的意味を考察する。

先行研究において、『小刀会』は「舞劇民族化」の成功例、あるいは中国舞劇史における代表作として高く評価されてきた。1950年代の舞劇萌芽期において、民族舞踊、武術、伝統演劇を融合させて、革命歴史を舞台化した点は、画期的な成果としてしばしば言及されている。しかし、こうした評価は題材の政治的正統性や芸術形式の「民族化」に偏りがちで、人物造形や舞踊表現の具体的な分析は十分ではない。一方、近年の英語圏における中国舞踊史研究では、『小刀会』は新中国初期における女性身体の革命を象徴する事例として位置づけられ、女性が武装蜂起の主体として描かれている点がフェミニズム的視点から注目されている。ただし、この女性英雄像も国家主義的な物語構造に組み込まれており、主流の革命叙事の枠内で形成されている。また舒巧自身にとっては、本作の成功が一種の足かせとなり、1980年代以降の自由な創作活動に影響を及ぼした。

本発表は大きく三点に分けて論じる。第一に、振付師らの筆記資料をもとに創作過程や背景、当時の舞踊批評を考察し、1960年代における『小刀

会』の位置づけを明らかにする。巡演の過程や当時の評価を踏まえ、創作者が行った舞劇情節の修正や、舒巧自身の演技の変化を分析する。たとえば、バレエのリフトを取り入れたロマンチックな場面や、周秀英が恋人や家族のために悲しむ場面は削除され、代わりに周と兵士たちが共に苦楽を分かち合い、悲しみを力に変えて突破口を切り開く場面へと置き換えられた。この修正は、女性英雄像を強健で勇敢な戦闘者として強調する一方、女性としての脆さや内面の哀しみを抑制し、政治的イデオロギーに捧げるものとなっている。

第二に、文献や映像資料をもとに、周秀英役を演じ、「弓舞」を振り付けた舒巧の創作手法とその特徴を分析する。とりわけ彼女が描いた女性兵士像を再評価することを目的とする。『小刀会』は立ち回りが多く、純粋な舞踊シーンは少なかったが、「弓舞」は作品中でも特に高く評価された場面である。この場面では伝統演劇、民間舞踊、武術を融合させた動きが展開され、周秀英は兵士たちの弓術訓練を指導する。男兵が女兵に弓を教え、女兵は横跳びで矢を放ち、隊形を変えながら横跳び、回転、蹴り、伏せなどの動作を組み合わせる。砲声の中、周秀英自身も訓練に加わり、男兵に支えられて空中を飛翔する。さらに女兵が男兵の体の上を跳び越えてリフトされるなど、群舞は整然とし迫力に満ちている。周秀英の飛翔する姿は当時の宣伝ポスターにおいて男性のリフトする姿が切り取られ、舒巧のみが「飛翔する女英雄」として強調されていた。

第三に、『小刀会』が外交の場で果たした役割を考察する。1963年の朝鮮公演や1964年の松山バレエ団との交流を通じ、国際友好の象徴として機能された。松山バレエ団は本作を学び、1966年には東京文化会館で初演し、その後も第4回訪中公演などで上演している。松山樹子と石田種生の振付によるバレエ『小刀会』は3幕7場構成で、松山樹子、大久保公子、小沢佳世らが主演し、日本国内でも繰り返し巡演された記録が残っている。これらの事例は、『小刀会』が冷戦期の日中文化交流において重要な契機であり、作品が外交の役割を果たしたと言える。

以上の分析から、『小刀会』は国家主義のプロパガンダ舞劇として制作されながらも、女性英雄像を通して民族化とジェンダー批評という二重の意味を帯びていたことが明らかとなる。本発表は、近現代中国舞踊史における身体と政治の関係を再考する新たな視座を提示することを目的とする。